

住 近 況

代表的な正月飾りといえば、松に竹。でも、なぜ松に竹なのか。松も竹も一年中枯れることなく常緑を保つので、それにあやかって変わらないう健康をお正月に願うのです。と、説明するのが普通でしょう。しかし、本当に松も竹も常緑なのでしょうか。

冬の松はやはり緑が薄くなりますし、春に新芽が出た後に落葉します。竹も春にたけのこが生え、親竹は衰えて葉を落とす。落葉樹が新芽を出す春に葉を落とし、落葉樹が色づく秋には真っ青の真っ盛り。松も竹もへそ曲がりな植物です。

へそ曲がりだから、俳句歳時記で「竹の秋」という季語は春の項目にあり、飯田蛇笏の次の句を紹介しています。

滋賀の雨花菜つづきに竹の秋

黄色の菜の花の群生する先に、いつもの緑色ではなく、少し黄ばんだ竹林がある景色でしょうか。反対に、「竹の春」は秋の季語です。

ところで、中国・宋の時代に編集された碧巖録という禅の書物には、次のような一節があります。

「南地の竹、北地の木」（碧巖録第十二則「洞山麻三斤」）

南方の温かい地方には竹がよく育ち、北の寒いところでは木がよく茂る、といった意味です。つまり、「あるがままであるしかないのだ」という教えでしょうか。

あるがままというのは、事実のとおりという意味です。自動車のナビが道案内をはじめるときに「実際の交通標識に従ってください」というじゃないですか。あれですね。予定と異なる状況に出会ったら、柔軟に変化しなさい、というのです。一年中、装いを変えずにいつも緑色している松や竹でも、人知れず葉を落とし変化しているのです。

そんな松と竹を、新年の本尊さまにどんな形でお供えしようかと、思案しています。楽しみにお参りください。と書いても、玄関先でそくさと帰られる方がおられます。気持ちにはわかるけれど、短い法要だから座っていつて！